

水平線【院長コラム 2026 年 6 月】

「犬」

朝歩きに出るのは、老齢となった犬を連れていくためだ。以前は単身赴任だったので歩くのは休日のみであったが、現在は毎朝一緒である。

犬は起床時刻の朝 5 時よりかなり早く起こしにくる。顔をなめたり大きな体を転がしておねだりする、家の中で見せるその仕草には愛嬌があり、私にとっても散歩が単なる決まり事ではない楽しみになっている。

その犬が 4 月中旬、突然両目の視力低下に見舞われた。一時良くなったように思えた時期もあったが、6 月にとうとう完全に視力を失った。

犬は見えないことで怖いという感覚があるようだ。電柱や壁などに突然当たるのは相当ストレスのようで、何度か繰り返すと前に進めなくなってしまう。

そこで犬に付けたリードを短く持ち、「そこは右、左」「まっすぐ」「止まれ」「あぶない」などと言いながら散歩コースをたどるようになった。この犬は盲導犬として活躍する犬種でもあるのだが、さながら私が盲導犬ならぬ盲導人になったような気分である。

失明した犬と暮らしていると、怖いと感じる以外に悲しいとか、残念だ、歯がゆいなどという感情があるのだろうか？と思うのだが、そんな様子を微塵も見せない無垢な表情に、却って私の感情は揺さぶられる。

犬は飼いはじめから最後を迎えるまで、一生のすべてを私たちに見せてくれる。もう長くは付き合ってくれないだろうが、この犬(ごん)が私の感情を豊かにし、私に豊かな暮らしを与える家族であることに感謝し過ごそうと思う。